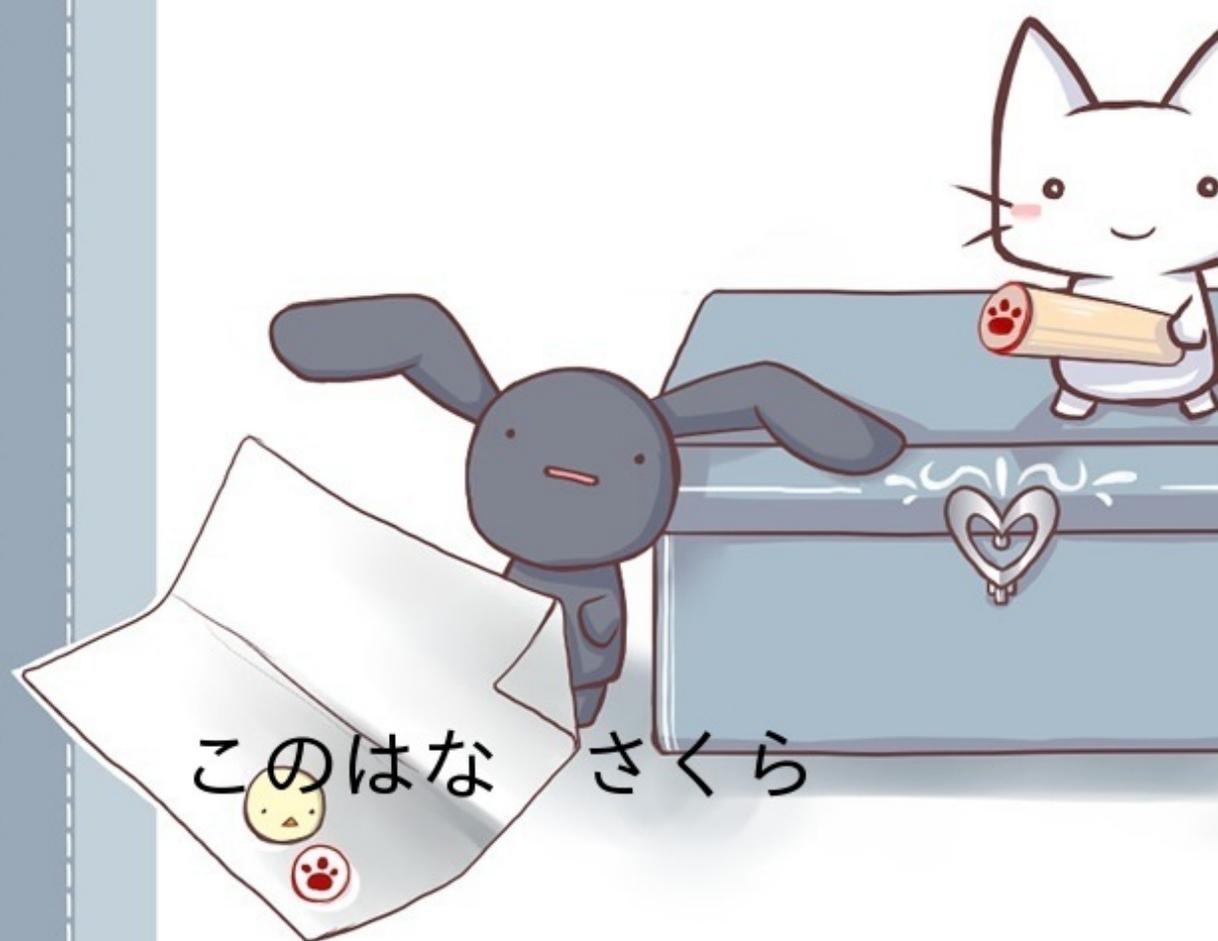
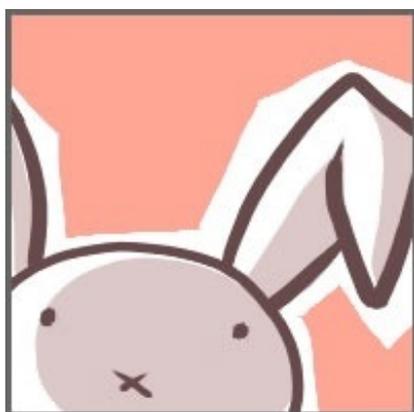


恋愛ショートショート

携帯が鳴るたびに。



このはな さくら



恋愛ショートショート□

携帯が鳴るたびに。

このはな さくら 著

携帯の音が鳴って、夫はそそくさと居間を出て行った。

これで、三回目。

今日だけで三回目。

携帯の電子音が鳴るたびに、わたしは同じ数だけ、ため息をつく。

夫は最近、帰りが遅い。

不景気だと言うのに、休日出勤もざら。

今日も土曜日なのに、頻繁に携帯に呼び出された。

彼に尋ねても、「仕事だよ」のひと言。

まさか。

でも。

不安が頭をよぎる。

彼の目を盗んで、こっそり夫の携帯を見ようとしたことが何度もあった。

彼を信じたい。

信じなければ……。

真実を知るのがこわくて、わたしは携帯を元の場所へすぐに戻した。

夫がスーツを持って居間に戻ってきたので、わたしはソファから立ち上がった。

「また、仕事なの？」

「ああ」

彼は、短い返事をして着替え始めた。

「上司から応援を頼まれちゃってね。どうしても行かないといけないんだ」

「そう……」

せっかくの土曜の夜なのに。

わたしは、悲しくなってうつむいた。

「新婚なのに全然ゆっくりできなくて、ごめんな」

「あ……！」

ふいに引き寄せられ、彼の胸に抱きしめられた。

小さな子供をあやすように、彼がわたしの背中を撫でる。  
わたしは目を閉じて、彼の手のひらの温もりを感じた。  
そうだ、私は選んだのだ。  
この手を。  
たとえ彼に裏切られていたとしても、わたしは……。  
わたしは……。

彼を愛してる。  
そう、わたしには彼しかいないのだから。

「ううん、いいの。あなたが帰ってくるまで、わたし待っているから」  
決意をこめた眼差しで、わたしは彼を見上げた。  
「待ちたいの。お願い、いいでしょう？」  
すると、彼は困ったように小首をかしげた。  
「バカだなあ、先に寝てていいのに」  
彼が優しく微笑む。

そして、わたしたちは目を閉じて唇を重ねた。

「できるだけ早く帰ってくるよ」  
玄関先に座り靴を履きながら、彼は言った。あわただしく立ち上がる。  
「気をつけてね」  
「ああ」  
彼がドアの取っ手に手をかけたとき、わたしは足りないものに気がついた。  
「ちょっと、待って」  
「なに？」  
「ほら、忘れ物」  
わたしは、廊下の隅に置いてあった彼の仕事道具を差し出した。  
黒いフード付のマントに、背丈ほどの長さの鎌。彼の大切な仕事道具だ。  
彼は、しまったという顔をした。  
「はあ～、何やってんだよ、オレは。相当呆けてんなあ」  
「ふふ、疲れているのよ。仕方ないわ」  
わたしは、笑いかけながら彼の後ろに回り、彼の肩にマントをかけた。マントの紐を彼に手

渡す。

「あちこち不景気で、自殺者が急増しててね。魂を回収するのが大変なんだ」

彼は、マントの紐を受け取ると胸の前で結び始めた。

「えっ、そうなの？」

じゃあ、頻繁に携帯が鳴っていたのは、そのせいだったのね。

急激に顔が熱くなるのを感じた。

「わ、わたし、誤解していたみたい。あなたに、わたしの他に女の人がいるのかと……ごめんなさい」

「なんだ、元気がないと思ったら、そんなことを考えていたのか？」

彼は驚いて目を丸くした。あきれたように首を横に振る。

「オレのために人間界を捨てたお前を、悲しい目に合わす訳がないだろう？」

鎌を手に持ち、黒いマントを大きく翻した。不敵な笑みを浮かべて、ニヤリと笑う。

「お前は人間なのに、死神の、このオレを選んでくれたのだからな」

そう、彼は死神。

わたしは、人間。

わたしたちは出会い、恋に落ちて、永遠の愛を誓った。

だからきっと、彼も愛してくれるだろう。

わたしの寿命が尽きる、その瞬間まで……。

END



恋愛ショートショート□  
携帯が鳴るたびに。

<http://p.booklog.jp/book/23708>

著者：このはな さくら

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/konohana-sakura/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23708>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23708>